

早稲田大学大学院日本語教育研究科

2009年9月

博士論文審査報告書

論文題目：初級日本語学習者のための待遇コミュニケーション教育
スピーチスタイルに関する「気づき」を中心に

申請者氏名：ウォーカー 泉（ウォーカー イズミ）

主 査 蒲谷 宏（大学院日本語教育研究科教授）

副 査 川口 義一（大学院日本語教育研究科教授）

副 査 小林 ミナ（大学院日本語教育研究科教授）

本論文は、待遇コミュニケーション教育を初級学習段階で実践するための理論と方法について考察したものである。特に、外国語としての日本語教育の現場において、学習者が待遇コミュニケーション能力をどのように身につけていくのか、教授者はその学習過程のどこにどのように介入し支援するのかを問題意識として、待遇コミュニケーション全体の中から、学習者のスピーチスタイルに関する「気づき」を起こすための指導方法を模索した論文である。

まず、第1章「序論」では、言語を表現行為、理解行為、そしてその相互行為と捉える言語観、言語教育はその行為の習得を促進するためのものであるという言語教育観に基づき、待遇という観点を重視したコミュニケーション教育、すなわち、待遇コミュニケーション教育を考察すること、特に初級日本語学習者に対する待遇コミュニケーション教育のあり方について、スピーチスタイルに関する「気づき」を中心に明らかにしようとすることが述べられている。

初級段階における待遇表現教育の重要性は早くから指摘されてきた。しかしながら、学習初期段階における待遇表現教育の実践はそれほど進んでいないという現状がある。教科書も、機能ごとの表現形式の導入に終わっているものが多く、表現形式の選択に影響する心理的・社会的要因の説明がなされているものはほとんどない。それはなぜかという問題意識、および申請者自身の教育経験に基づき、スピーチスタイルを中心とした待遇コミュニケーション教育を初級学習段階から始める必要があるのではないかという問題提起がなされている。

理論的な枠組みとしては、これまでの待遇コミュニケーション研究で示されている「コミュニケーション主体」、「場面」(「人間関係」と「場」)、「意識」、「内容」、「形式」が用いられ、それらが連動することの重要性を論じている。

第2章「研究の理論的背景」においては、まず、「待遇コミュニケーション能力とは何か」という問いかけに対し、「適応的熟達」に相当する高次レベルの処理を要する能力であることを考察し、待遇コミュニケーション能力促進のための教育に関して、第二言語習得研究、語用論的知識の習得における「意識」に関する先行研究を整理した上で、待遇コミュニケーション教育における「意識」について考察し、「気づき」の重要性について明確にしている。

その上で、下記のような研究の柱、研究課題が設定された。

研究 : 「観察タスク」における「気づき」

研究 : 「気づき」を促す「教授ストラテジー」

研究課題 1) 初級学習者は、スピーチスタイルに関してどのような知識を持っているか。

研究課題 2) 教育の介入は、スピーチスタイルに関する「気づき」を促すことができるか。

できるとしたら、学習者はどのような「気づき」を得られるか。

研究課題 3) 会話練習における「気づき」を促すための「教授ストラテジー」とは何か。

次いで、第 3 章「研究の焦点」においては、日本語のスピーチスタイルに関する考察の後、スピーチスタイルに対する認識不足、待遇表現教育としての認識不足、対人関係構築に関わる問題、自律学習を妨げる要因としての問題などが述べられ、スピーチスタイルの教育における「気づき」の重要性が指摘されている。

第 4 章「実践の背景」では、研究、研究 の前提となる、実践の枠組み、実践の背景、実践実現までの経緯と概要、スピーチスタイルの知識に関する実態について述べている。

第 5 章「研究 : 「観察タスク」による「気づき」」においては、実践 1 : シンガポール国立大学の学生 98 名を対象とする、映像メディアを活用した授業による「気づき」、実践 2 : 実践 1 にも参加した学生 65 名を対象とする、日本人小学生 (6 年生) との接触場面における「気づき」、実践 3 : 学生 62 名を対象とする、日本人高校生 (1、2 年生) との接触場面における「気づき」、それぞれの調査結果に関する詳細な分析、考察がなされている。

第 6 章「研究 : 「気づき」を促す「教授ストラテジー」」においては、基底となる会話教育理論、「コンテキスト化練習」における「教授ストラテジー」、「コンテキスト化練習」の応用などについて考察されている。

第 7 章「結論」においては、研究の総括として、

研究課題 1 については、教科書でスピーチスタイルを導入しても、それだけでは、スピ

ーチスタイルに対する意識を高めることはできないこと、

研究課題2については、教育の介入はスピーチスタイルに気づきを促すことが可能であること、言語的な制約の大きい初級学習者でも「観察タスク」は「待遇」の諸相やその連動に「気づき」を促すことが可能であるということ、

研究課題3については、コンテキスト化練習を調査データとして分析、整理した結果7つの教授ストラテジーが見出せ、それらは待遇コミュニケーション能力に働きかけるものであり同時に学びの過程を促進するために有効なストラテジーであること、などが述べられている。

それらを踏まえ、最後に、「理解先行型」の教育に基づく、スピーチスタイルを中心とした「初級学習段階における待遇コミュニケーション教育」の提言がなされている。

以上、本論文の概要について述べてきたが、本論文は、次の3つの点において極めて優れていると判断する。

(1) 教育現場での素朴な、しかし、広く共感できる疑問(「初級レベルでは、文末のスピーチスタイルの習得は難しいのではないか」「尊敬語は、初級の後半で導入するだけで十分なのだろうか」等)を、3つの明確な研究課題に昇華させたこと。

(2) 自ら設定した3つの研究課題について、緻密なデザインに基づいた教育実践を行い、その結果分析の積み重ねにより、回答を得たこと。

(3) スピーチスタイルが極めて複雑で動的なものであることを前提に、教室活動の意義、役割を再考したこと。

すべての調査は、申請者自身の勤務する大学の日本語クラスの学習者を対象にした実践研究であるため、調査された学生への研究成果の還元が可能であり、研究倫理的に見ても望ましい調査である。まず、第1の実践において、学習者のスピーチスタイルについての意識の現状を調べ、その意識は、教科書による解説や待遇教育上無目的なドラマ・アニメの視聴では惹起・強化されていないということを引き出した。続く、第2、第3の実践では、日本語母語話者との交流活動という接触場面の「観察タスク」を通じて、動的な現象であるスピーチレベル選択のありかたに対して、学習者が「気づき」を得、そこから進んでその「気づき」を変容させていく様子を鮮やかに描き出している。以上の調査結果に基づ

き、「観察タスク」による「気づき」のありかた、そしてその「気づき」を促す教授ストラテジーについて論じ、学習者が待遇コミュニケーション能力を高めていくために、彼らが克服しなければならない問題とその解決のための教授者の教育デザイン上の課題を議論しうる成果が導き出された。

研究課題の設定、使用データ、調査分析の方法論、得られた結論のいずれにおいてもオリジナリティが高いものと評価する。

一方で、得られたデータからスピーチスタイルに関わる記述を抜き出す際、その基準をどこに設けたのかなど、若干、重要な説明箇所に不足、不明瞭な点が見られたが、口頭審査でのやりとりによって、それは記述の問題であり、本質的な問題ではないことが確認できた。

また、スピーチレベルを自律的に選択・創造できる能力は、待遇コミュニケーション能力の一部に過ぎないため、類義の狭義敬語の選択、その他の言語・非言語形式と待遇コミュニケーションとの関係認識、そもそもある話題を取り上げるべきか否かの判断なども調査する必要があると考えられるが、それらについては今後の課題として期待したい。

「結論」の部分では、スピーチスタイルを中心とした待遇コミュニケーション能力の陶冶に関して、どのような教授理念と教授法が必要かを論じており、今後類似の教育分野に関心のある世界の日本語教師にとって極めて示唆に富むものであり、本論文が日本語教育研究全体に対して、学術研究上にも教授実践上にも大きな貢献をなす可能性を示すところでもある。この部分の論考がそれまでの調査分析の内容を踏まえ、しっかりとした理念を持って語られていることによって、本論文は、全体として、博士（日本語教育学）の学位を授けるべき論文としてふさわしい内容のものであると判断できる。